

「孫文を支え続けた日本人」

梅屋庄吉について

今からおよそ100年前、中国では民衆の反乱をきっかけに清朝が滅び、アジア最初の共和国である中華民国が成立しました。この革命（辛亥革命）を指導し、中国の近代化を進めたのが「中国革命の父」と呼ばれる孫文です。この革命成功の陰には、孫文を支え続けた一人の日本人の存在がありました。長崎生まれで、日本活動写真株式会社（現在の日活株式会社）の創立者の一人である梅屋庄吉です。

【生い立ち】

梅屋庄吉は、1868（明治元）年長崎市で本田松五郎・ノイ夫妻の子として生まれ、米穀商や貿易商を営んでいた遠縁の梅屋吉五郎・ノブ夫妻の養子として育てられました。庄吉は、14歳の時には仲間と共に地元の不良グループをこらしめたり、上海へ渡航し、中国の植民地化を目の当たりにしていきどおったりするなど、行動力旺盛で正義感の強い、たくましい少年に成長しました。

【青年時代】

商才に恵まれていた庄吉は、その後精米業や鉱山経営などに乗りだし大きな利益を上げましたが、1892（明治25）年に米相場への投資で大失敗し、多額の借金をつくってしまいます。庄吉は中国のアモイへ渡り、シンガポールを経て最終的に香港に落ち着き、写真館を開きました。残された借金は、両親が財産を手放して返済しました。その後、香岐出身のトクと結婚し、その傾手がけた映画興行に成功して、多額のお金を手にします。1905（明治38）年に日本に帰国した庄吉は、映画興行会社を設立し、映画制作に取り組むようになります。



梅屋夫妻と孫文（写真中央）
（小坂文乃氏提供）

【革命家孫文】

一方、中国では1840年のアヘン戦争をきっかけに、諸外国による植民地化が始まっていました。度重なる戦乱による国土や生活の破壊、後を絶たない役人の腐敗などのため、民衆の不満が高まり、国内は混乱していました。こうした中、1866年に中国広東省の農村で、孫文は誕生しました。若いころは医学を志し、広州で開業するまでになりましたが、国内の悲惨な状況を変えるために清朝を倒すことを決意し、三民主義をかかげて革命団体の組織作りに尽力しました。



少年時代の梅屋庄吉
（小坂文乃氏提供）

三民主義

孫文が唱えた革命の指導理論。民族の独立（民族）、政治的民主化（民権）、民衆生活の安定（民生）の三つからなる。

【運命の出会いと二人の友情】

庄吉と孫文は、1895（明治28）年英国人医師カントリー博士を介して、庄吉が経営している写真館で初めて出会いました。庄吉27歳、孫文29歳でした。2人は中国の未来について熱く語り合い、孫文の考えに深く共鳴した庄吉は、「君は兵を挙げたまえ。我は財を挙げて支援す。」と革命への財政的な支援を約束し、生涯孫文と中国革命を支え続けました。孫文は1895（明治28）年の最初の挙兵以来、7年間で10回も兵を挙げましたが、庄吉は映画興行で得た利益を孫文が志した革命の費用に惜しみなく提供し続けました。

1911（明治44）年、辛亥革命に成功した孫文は南京政府臨時大総統に選出され、翌年正式に就任し国号を「中華民国」と決めました。武昌（湖北省）蜂起成功の報を受けた庄吉は、すぐに撮影技師を中国に派遣して、革命の様子を映画に記録し、孫文が来日した際には映画館を貸し切って孫文のために上映しました。

しかし、孫文が起こした革命は、臨時政府内の対立や列強の干渉で行き詰まり、間もなく清朝の武将であった袁世凱が政治の実権を握るようになりました。身の危険を感じた孫文が日本に亡命すると、庄吉は身の回りの生活費から革命継続のための活動費まで、幅広い援助を行いました。また、孫文のよき理解者であった宋嘉樹の二女宋慶齡との間を取り持ち、結婚式を挙げさせたのも梅屋夫妻でした。

【日中友好のために】

袁世凱打倒を目指して中国へ帰国した孫文でしたが、1925（大正14）年「革命いまだ成らず」の言葉を残し、北京で息を引き取りました。58歳でした。

庄吉と孫文が出会ってからちょうど30年。孫文の死は、革命を支え続けた庄吉にとって大きな衝撃でしたが、孫文の銅像をつくり中国へ贈る活動を行うなど、孫文の偉業を後世に伝えることに情熱を傾けるとともに、満州事變の勃発など急速に悪化しつつあった日中関係の改善のために奮闘しました。

1934（昭和9）年9月、平和交渉のために東京に向かう途中、庄吉は亡くなりました。若き日の孫文との約束を守り続け、最後まで日本と中国との友好親善に力を尽くした65年の生涯でした。



孫文の銅像と梅屋庄吉
（小坂文乃氏提供）

— 日中友好に懸けた生涯 —